

KSKP えのき

NEWSLETTER

地域で当たり前に暮らすために

編集人：社会福祉法人えのき会
理事長：古川 末子
京都市伏見区桃山町山ノ下44-8
075-605-0303 (TEL)
075-605-0310 (FAX)
e-mail:info@enokikai.or.jp
http://enokikai.or.jp

1984年8月20日第3種郵便物承認 毎月(1・2・3・4・5・6・7・8の日) 発行 定価100円

余寒お見舞い申し上げます

皆様にはご健勝のこととお慶び申し上げます
本年も変わらぬご支援をお願い申し上げますとともに
皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます
えのき会 役員一同



昨年は、各地に大雨や台風などの大きな災害がありました。この一年が、どうか災害のない平穏な年である事をただ祈るばかりです。

スウェーデンの高校生、環境保護活動家グレン・トゥーンベリさん(16)が、各国の首脳を前に「大人がお金や経済成長を優先し、子どもたちの生きる環境を悪化させ、未来のための資源を破壊した」と訴えました。

私たち大人に向けられた言葉であり、何もしてこなかったことに心の痛みを感じながら、できることから始めるしかありません。

OECD(2018年)の統計では、日本の労働者の賃金が先進国の中で唯一マイナスであることが明らかになっていきます。企業が人件費を抑制し、働いても賃金は上がらない状況になって

います。非正規雇用者、男女の賃金格差も依然とあって、シングル女性の女性、シングルマザー(母子家庭)の半分がワーキングプアであり、子どもの貧困にも繋がっています。

こんな格差社会から誰も排除されることのない、持続可能な社会に向けて、また次世代を担う子どもたちの環境や教育について、おのれの私利私欲のための政治ではなく、国や社会のあるべき姿を語る政治が、今必要です。

高村薫さんが「作家的覚書」のなかで『今繁栄の終わりの時代を、何を指して生きるか。』

社会の最大の価値を子どもが仕合せに暮らすことに置くこと。そのために予算の配分を変えていく。

子どもたちが平和で誇

りに満ちた社会に暮らすために、もう一度歴史認識の整理を国家レベルで徹底させること。平和を守ってきたこの国が、世界から歴史認識が間違っていると非難され孤立するのは、国益や東アジアの安定にもつながらない。子どもたちに戦争をさせてはならないという明確な道を未来の意思にする。

江戸時代から築いてきたさまざまな財産をできるだけ長持ちさせ再生させ、生まれ変わらせて活かし続けること。この国の豊かさのストックがあれば、安定した低成長社会のモデルになれる可能性がある」と。

今の政治が、時代の合わせ鏡であるとするれば、次世代のために、今を生きる私(たち)のために、「ノー」と異を唱えることが時に必要だと思います。

(理事長 古川末子)

キャリア職員の処遇改善を実施

国は社会福祉事業に従事する介護職員の処遇を改善するため、介護報酬に一定の割合で加算して支給する制度を定期的に改善し取り組んできました。

さらに昨秋より、介護人材確保のための取組をより一層進めるため、経験・技能のある職員に重点化を図りながら、介護職員(障害福祉人材も同様)の更なる処遇改善を進めることが強化されました。具体的には十年以上の介護福祉士等について賃金の見込み額が年額四四〇万円以上に改善させることが国の基本的な考え方です。

えのき会では、これまでの処遇改善加算を活用しベースアップに努めてきており、新規卒卒者の基本給は十九万強になっています。しかし、管理職を除くと年俸四四〇万円を超える一般職員は皆無でした。今回の取組みはキャリアのある職員には朗報であり、将来の生活に不安を抱いていた若年層にも活力を与え、資格を取得し継続して業務に就く職員が定着していくことが期待されます。同時に、質の向上も目指していきます。

(統括部長 村上高久)

えのき会で働く職員さん3名

10年以上キャリアを積んだ人、1年を迎える職員さん、グループホームの世話人さんに登場してもらいました。

かけていくなかでこのまま働き続け、みなさんに支えてもらって仕事を続けさせていただいています。

14年目を迎えて思う

村上詠子さん



えのき会に入職して早いもので13年が経ちました。福祉の現場では働いた経験はあったものの身体介護など重度の障がいのある方と関わる経験がなく、入職当初は介護方法など一から教えてもらい、「コミュニケーションの方法もわからず戸惑うことばかりでした。

どのように話しかけていいのかわからず戸惑うことばかりでした。情の変化もわからず支援に入りながら本人はもちろんですが保護者の方や職員など周りの方々から学びながらの日々でした。

今は本人の生活に直接関わることやニーズに対しての支援利用を考えたりと様々なことをさせていただいています。ただ、この間には産休や育休も取らせていただき、子どもの病気や行事等で休まざるを得ないことも多々あり、時には保育料や病児保育代金の負担が大きいのしかかったこともありました。また家族にも役割分担でやっていく部分もちろんです。後、髪を引かれる思いで家や保育園を出て仕事へ行くこともあり、いろいろな負担を

しかし、いろいろな周りの方々、職員、利用者さん保護者の皆さんも含めて、みなさんに支えてもらって仕事を続けさせていただいています。

またここ数年、給与面においても永年継続手当も含めてとても評価していただき、みんなに支えてもらいながらも仕事を続けてきて本当に良かったと思っています。

これからもえのき会の「どんなに重い障害があっても地域で暮らす」という理念のもと利用者ひとり一人と向き合い、働きやすい職場を目指し自分が動いていく責任感を感じています。

まだまだ学んでいくことも多いですが、自分ができることを精一杯えのき会とともに成長していきたいと考えています。

入職して、もう1年に！

村田望さん



えのき会に入職して、一年が経とうとしています。えのき会に入職する前は、福祉の専門学校に通い、そこで様々な医療福祉の勉強をしたり、実際に障がい者施設、高齢者施設などの福祉施設に見学・実習に行くなど、忙しく学

生生活を送っていました。そんな中、ふと学校に張り出されていた福祉フェアのチラシを見て友達と参加したことが、この「えのき会」との出会いでした。

説明会に参加してから、えのき会の採用担当の職員の方から度々施設見学の内容を下さったり、時には就職のことと関わらず学校生活の悩み相談に乗ってくださったり、色々な角度から手厚く就職活動のサポートをして頂きました。そうしている間に、気付けばトントン拍子でこのえのき会に就職することが決まりました。

しかし、正直、始めはスムーズに就職が決まりすぎたことで、ろくに就職活動をしていなかった私は不安だらけでしたが、始めにえのき会へ実習に行った時、それまで抱えていた不安がなくなり、「ここに決めてよかった」と感じたことを今でも思い出します。

利用者の方が楽しそうに笑顔を見せられておられ、それを見ている職員も楽しそうに笑顔が浮かべられている、そんな笑いに溢れる明るい職場だと感じました。それは就職してから一年が経とうとしている今でも変わらず感じています。

そして、えのき会で利用者の方と接しているうちに、その明るさや楽しさを周りに伝染していくものだということを学びました。もちろん、慣れない仕事、日々の業務に追われ、気持ちに余裕が持てない時もあり、働くことを楽しむ瞬間もありますが、そ

ういった気持ちも、同じように利用者の方にも伝わってしまうということ、職員が思っているより利用者の方は色々なことを感じ取っておられるのだと感じる瞬間もあります。

そういった気持ちの動きに、気づけるような広い視点を持つこと、そして忙しい毎日の中でも自分自身が楽しみながら利用者の方と関わっていただけるような職員になりたいと思っています。

グループホーム世話人として8年目を迎えます

私が世話人としてえのきで働きだして七年半程経ちます。午前中は洗濯、掃除、午後からは買い物、夕食と翌日の朝食作りが主な仕事です。

夕食と朝食で計五品のおかず、二品の汁物を作ります。私のレパートリーはすぐに底をつきました。何を作るか、さて困った、それから二週間に一度の図書館通いが始まりました。

私たちが普段食べている物と変わらない物を食べてほしいと思い、料理本を読みあさりしました。利用者の皆さんが食べやすい物、バランスの摂れた食事を選び毎日作りました。

なるべく多くの種類の野菜を使ったり、繊維の多い物は加工しやすいように細かく刻んだり工夫していますが、失敗も数多くしてきました。

例えばチーズを使った料理では、作り立ては柔らかいのですが、加工の段階で少し硬くなっており、食事の時間にはさらに硬くなっていて、食べにくくなっています。いろいろ試し、繰り返ししながら、現在も勉強中です。

そんな中でも、今日は何を作ろうかなあ、と皆の顔を思い浮かべながら献立を考えるのが、楽しい日課となっています。

毎日午後三時半頃から、利用者の方が次々とホームに帰ってこられます。今日はどんな時を過ごされたのかなあ、と思いつつ、食事の準備をしながら一人一人に「おかえりなさい」と声を掛けます。「ただいま」と返してくれる人。

笑顔を見せてくれる人。何だか機嫌の悪い人。そっぽを向く人。反応は様々ですが、皆とても愛しく、まるでわが子の帰りを迎える母親の心境です。

そんな利用者さんが、食事をおいしいと言ってくれたり、ムセもなく食べてくださったりする時間がほっとする、とても幸せな瞬間です。

また、職員さんの日々の頑張りを目にしたり、「いつも掃除ありがとうございます」と声をかけてくださったり、とても励みになっています。見てくれている人がいるんだと思つた。

食事作りだけでなく、掃除も頑張ろうという気持ちになります。



毎日掃除、洗濯をし、食事を作る。それは快適に過ごしてもらいたい、食事を楽しんでもらいたいと願つた。その思いは、まるで家族に抱くような愛情に似ています。えのきの皆さんは、今では私の大事な家族のような存在になっています。



グループホームの調理、加工方法を、他法人のイベントで披露しているようす

はや6年！ 娘がグループホームに入居して

森昌代

入所施設 麦の穂学園から、地域移行されて6年を迎える森玲子さんのお母様に、今の心情を綴ってもらいました。
地域移行支援とは、障害者支援施設等に入所している人が、グループホームやマンション等で地域生活を始めるための相談や必要な支援を行うこと

えのき会への地域移行ができたのは、グループホーム「ベル」の一部屋が空いて、当時、麦の穂学園に施設入所していた玲子にも、申し込めると教えてくださったお母さんのおかげです。

移行してはつきり言えるのは、風邪を引かなくなったことです。麦の穂入所時は、風邪が流行ると一番にベッドで横たわっていました。加湿器を購入してみました。加湿器は、毎年一番乗りで風邪でベッド入りでした。

えのき会での生活では、グループホーム「ベル」からデイスーパーのきに通うことにより、夏は暑い日差し、冬は寒い風に当たることにより体が鍛えられて丈夫になったのと、冬の乾燥には各部屋での加湿器で管理することにより空気も、いい状態です。また、外出することが多く

なり、歯科センターへは地下鉄で、ヘアカットのため美容室へ。月に一度は「ベル」より外出があり、2〜3年に1度は、1泊2日で旅行もあります。

月1回、ヨゼフ整肢園のPT（理学療法士）による運動機能の維持改善と、ST（言語聴覚士）による嚥下や食事形態等の助言や指導を受け、3か月に1度、医療センターへ通院しています。ヨゼフでPTさんによる訓練では、だんだん体が硬くなることを忠実にしてもらい、STさんには、「ベル」での朝食を持参してもらっています。

食材の量に合わせてとろみの量をベルのスタッフに考えていただき、誰が作っても同じになるのを聞いた先生は、驚かれています。

食べること（嚥下）が大変になってきた玲子には、無理と思っていた食材も、加工次第で食べられるようにと、栄養士さんに考えてもらっているのが元気に過ごせています。麦の穂入所時は、食事と栄養補助食で体重を維持していましたが、今では、食事だけで維持できています。ヨゼフの待合室で、以前お世話になった職員さんに「玲子さんの笑顔を見ただけで、今の所がいい場所だと分かる」と言ってもらったのは嬉しかったです。

玲子に「えのき」や「ベル」に移って良かったか？と聞くと、いつも笑顔でうなずいています。この時の笑顔で、えのきへの決断をして良かったと思います。えのきの職員の皆さん、ありがとうございます。



一勉会安全衛生協力会 様よりご寄付

～スヌースレングッツ、車いす用体重計を購入費用として～

昨年12月20日、一勉会安全衛生協力会様より、金30万円をご寄付を頂きました。

その寄付目録贈呈式が、京都市保健福祉局局長室に於いて、三宅局長、徳永推進室長の同席のもと行われました。えのき会より村上



部長と清水副所長が出席し、目録を受領させていただきます。感謝を贈呈し



ました。このご寄付を、より有効に活用するため「車いす用体重計」、音や光、におい、振動、温度、触覚の素材を組み合わせてラクゼーションが、

のある人たちも楽しめる「スヌースレングッツ」の購入費用にさせていただきます。

一勉会安全衛生協会の皆様
ありがとうございました。

佑悟さん 成人おめでとう!



成人式でのスーツ姿でもカッコよく、素敵でした!
榎の家とさくらの家、皆でお祝いすることができて、とても嬉しく思います。

一緒にいる機会も多いので、これからも楽しい良い思い出を作っていきますよ!
（脇本）

ご成人おめでとうございます。
成人式の佑悟さんは、スーツが、良く似合っていて、とてもカッコ良かったです。これからますますカッコいい大人になってください!
（熊倉）

佑悟さん、この20年で、とてもカッコよくなったので、次の20年では笑顔の素敵なオッサン目指してお互い精進していきますよ。
何はともあれ、おめでとう!
（廣坂）

新成人おめでとうございます!
三矢さんは出会った当時の面影を残しつつ、大人の男!といった感じですね。
これからも、みんなで楽しく過ごせたらと思います。
（平井）

今日まで、頑張ってきたことと、そして二十歳を迎えられたことを、皆で喜びたいと思います。
すっかり好青年になりましたね。
これからの人生、素敵なことが起こりますように...。
（古川）

編集後記

人工呼吸器をつけた重度の女性、海老原宏美さんが著書『私が障害者じゃなくなる日』のなかで、「町の中で目立っているだけでいい。車いすに乗ってぶらぶらしている人がいるなど、道行く人に思われたい、それで十分」

「ただの土の盛り上がりである富士山に感動し価値を見いだせるなら、自分と同じ人間である障害者にも価値を見いだせるはず。」ただ静かにそこにいるだけで人間の価値とはなにかを、考えさせてくれる障害者は、それだけでじゅうぶん存在するいみがあるのではないか。

入所施設から出て、えのき会の支援を受けて地域で暮らし玲子さんが、買物や美容院、旅行など、人として当たり前に行きたい所へ出かけられることが、こんなさやかな喜びが、障害のある人を生き生きと元気づけます。自由に外を歩けること、この権利(制度)は、しっかり守っていかねばなりません。

先日、相模原の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で、重度の障害者は生きるに値しない命として犯行に及んだ事件の公判が始まりました。

全容解明はこれからですが、日々、障害者と暮らし家族として、決して忘れられない、忘れてはならない事件です...。
（十）

□ 発行人・関西障害者定期刊行物協会
大阪市天王寺区真田山町2-2
東興ビル4F



□ 編集人：(福) えのき会 理事長 古川末子
(法人本部)
〒612-8002
京都市伏見区桃山町山ノ下44-8